

外来種と窃盗：島の植物相への脅威

奄美大島が世界自然遺産に登録されたことにより、侵略的外来植物の問題やさらなる拡散が注目され、監視する必要性がでた。外来植物は、街路樹や庭園ように島に持ち込まれたが、一度定着すると、固有植物を時には抑制し、競合しあうこともある。その中でも最も被害を及ぼす外来種がツルヒヨドリで、繁殖力の高い熱帯の雑草で、1つの幹から40,000個の種を種を多量につける。また、オオキンケイギク (*Coreopsis lanceolata*)は北アメリカ原産の花で、日本生態学会により日本の侵略的外来種ワースト100に選定された。政府・非政府組織はこのような植物の持ち込みや拡散を阻止するよう、一般の認識を高める努力をしている。

希少種や固有種の窃盗や採取も奄美大島の生物多様性の高い環境への脅威になっている。最も弱い植物は特に標的にされ、絶滅寸前、またはすでに絶滅している。政府・非政府組織は、ことの深刻さを伝えるようにはしているが、現状、信頼性のみに頼り、窃盗を防ぐことしかできない。